

第 10 回定例教育委員会 会議録

開催月日 平成28年10月19日 (水)

開催時間 午前 10 時 06 分から午前 12 時 00 分まで

開催場所 教育委員会室

出席委員 教育長 守屋 守
教育長職務代理者 白川 太
教育長職務代理者 飯室 元邦
委員 和田 一枝、野田 清紀、武者 稚枝子

出席職員 教育次長 宮沢 雅史
学力向上対策監 井上 耕史
総務課長 小島 良一
福利給与課長 柏木 精一
学校施設課長 望月 啓治
義務教育課長 青柳 達也
高校教育課長 手島 俊樹
社会教育課長 岩下 清彦
スポーツ健康課長 赤岡 重人
学術文化財課長 小澤 祐樹
新しい学校づくり推進室長 鈴木 昌樹
国体推進室長 三井 勉
企画調整主幹 成島 春仁
総務課総括課長補佐 草間 聖一
政策企画監(総務課課長補佐) 古澤 善彦
総務課課長補佐 篠原 孝男
総務課課長補佐 望月 明男
総務課副主幹 保垣 利恵
義務教育課人事管理監 中込 司
高校教育課人事管理監 小川 弘一
新しい学校づくり推進室主幹 金塚 正貴
スポーツ健康課課長補佐 岩崎 雄治

傍聴人 0 名

報道 3 名

会議要旨

[教育長開会宣言]

議案20号及び議案21号、報告事項(8)、その他報告(14)については、個人情報に関することであるため、非公開としたい旨が教育長から発言され、出席委員全員が了承のうえ、非公開とした。

1 議 案

第 20 号 山梨県社会教育委員の委嘱・任命について

(非公開)

[説明] 社会教育課

【原案どおり決定】

第 21 号 山梨県考古博物館協議会委員の委嘱・任命について

(非公開)

[説明] 学術文化財課

【原案どおり決定】

2 報告事項

(8) 平成28年度山梨県教育功労者表彰について

(非公開)

[説明] 総務課

【 了 知 】

3 その他報告

(14) 平成29年度採用山梨県公立学校教員選考検査について

(非公開)

[説明] 義務教育課・高校教育課

【 了 知 】

(15) 平成28年度中学校卒業予定者の第1次進路希望調査結果の概要について

[説明] 新しい学校づくり推進室

- 野田委員 4点あります。
1点目は県外の高校・高専の希望者は大体どのへんの高校を希望していらっしゃるのか。
2点目が全体の進学率が他県と比較してどの程度のものなのか。
それから3点目です。増穂商で今こういう募集が出ていますね。増穂商は、多分富士川町と南アルプス市の多い所ですが、富士川町はともかくとして、南アルプスを含めた以北の生徒はどれだけ増穂商に希望しているのか。ここの合併の問題もあるので、聞きたいなど。
あと4つ目は、前期と後期ってありますよね。前期と後期で分けて、果たしてその分けたメリットがあったのかどうか。
その4点、お願いします。
- 鈴木室長 高専は県外の高専は沼津と八王子と長野がほとんどということですか。
高校は確認できておりません。
- 野田委員 私立高校はわからないですか。
- 鈴木室長 はい。
- 野田委員 例えば、僕の危惧しているのは、県外の私立高校へ流出しているんじゃないかと、そのへんがちょっと気になったので。
- 鈴木室長 また後で報告をします。
今の希望を、もしかすると希望先まではきっちり県外の場合は聞いてないかもしれませぬので、昨年度の状況等をまたお知らせをしたいと思います。
- 鈴木室長 それから2点目の全体の進学率が他県に比べてどうかというお話ですけれども、そこまで調べてございませぬので、調べてご報告させていただきます。
- 野田委員 今後、合併があるじゃないですか、そうすると今の動向を見ていないと、我々からするとどっちかってあそこへ行くというのはイメージが行きづらいんですよ。だから今、どれだけ来ていて、その人達が次の始まった時にどのくらい動くのかって知っておきたいなと思います。
- 鈴木室長 それから4点目の前期と後期で分けたメリットという話ですけれども、あくまでも生徒に多くの受験機会を与えるということで、前期募集制度というものを行っておりますので、生徒にしてみると、後期一度だけではなくて前期募集という入試があれば、二度入試を受けることができますので、その点はメリットであると思います。
- 野田委員 それ一つは生徒側のメリットじゃないですか。学校側のメリットで二段階入試を行って、例えばその以前よりも偏差値が上がったとか、質のいい生徒が集まるようになったとかという、そういうメリットがあったのかどうか。

- 鈴木室長 高校によってですけども、前期募集の場合、志願してほしい生徒像という、高校が求める生徒像を掲げまして、それに合うような子ども達が入学を希望してくるということがございまして、学校によってでございますが、非常にいい生徒が集まっている、という話は聞いております。
- 野田委員 はいわかりました。
- 教育長 先程の1番、2番、3番の質問であとでと言っているのは、今日答えられるんですか、それとも後日なんですか。
希望がどうい希望を取られているかちょっと分からないので、具体的に。そこは後程いつお答えをするのか。
- 鈴木室長 他県の状況がちょっと、他の2件はすぐ調べられると思いますけれども。
- 教育長 わかりました。
じゃあ、今日お答えできるのであればお答えしたほうがいいと思います。
- 鈴木室長 わかりました。
- 教育長 確かに3校再編の話がありますので、我々も分析をしておかなきゃならない話だと思いますので、この場でもう一度話題をして、意見があれば、よろしいでしょうか。
- 和田委員 先程、全生徒を対象にということだったんですけども、各校には不登校の子ども達がいるかと思うんですけども、そういう子ども達の希望も、昨年度は不登校だったけれども、定時制を希望して進学したという子もいるんですけども、そういう子ども達も全部調査の対象に入っていますか。
- 鈴木室長 入っております。
- 和田委員 そうすると、その子達が進学を希望しているのか、就職を希望しているのか、それから未定なのかというようなことも、数は少ないとは思んですけども、つかんでいるのでしょうか。
- 和田委員 今年度の希望調査ですよ。今年度、不登校の子ども達がどんな進路を選んでいるのかということ、数的には少ないとは思んですけども、県のほうでは把握をされていないでしょうか。
- 鈴木室長 調査の中で、今現在不登校かどうかということは、そこまでは聞いておりませんので。
- 和田委員 これから、昨年、私もちょっと仕事で関わった子達ですけども、定時制に行った子どももいるんですけども、不登校だったので試験に合格しなかったということで、学力が付いてなかったということで就職を考えて、途中で就職に変更している子もいるんです。そのまま家に引きこもった子もいるんですけど、そのへんの実態を県全体としてどんなふうになっているのかということを知りたいなと思ったんですけども。
卒業してしまうと、中学校までは学校だとか教育関係機関の支援があるんですけども、卒業してしまうと全く支援がなくなりますよね。高校に進学したり、就職している子達はいいんですけども、引きこもっている子ども達っていうのは中々支援が受けられないというようなことが出てきますので、それがどの程度なのか
本年度、中学3年生の。昨年度のことがわかれば、昨年度はどんなふうな様子だったのかということも分かったら、県全体の様子がわかればありがたいなと思います。
- 小島課長 義務のほうではそういうのを、要するにこれは進路希望調査なので、どうしても今言ったように不登校か不登校じゃないかとかということをして、その子達がどういうところを希望しているかというのは出してないと思うんですよ。逆に義務教育の段階、小・中の時に不登校の子ども達のそれからというのは何か把握しているものはあるでしょうかね。

- 青柳課長 そうですね、中3の不登校が、26年の調査が一番直近ですけれども、263名いますけれども、その子達がどこに行ったかという調査は、学校単位では把握していると思うんですけども、県のほうではしていません。
- 和田委員 ちょっと知りたいなというか、知っておいたほうがいいのかと思ったので。そのまま引きこもっている子ども達がどのくらいいるのかとか知っておいたほうがいいのかと思ったんですけども。
- 和田委員 難しいですかね。
学校のほうに行っても、きっと卒業後しばらくの間は子ども達のことを調べているんじゃないかなと思うんですけども。
卒業して引きこもっている子もいるんですけども、義務までの間は関わる期間がたくさんあるんですけど、卒業してしまったときに、どこで支援を受けて、どこで支援してもらえるのかということちょっと考えているケースがいくつかあるんですけども。
- 小島課長 多分、すみません、想像ですが、福祉のほうに移行していくんだろうと思うんですね。義務教育が終わって、その後、高校に入ればまた、もちろん学校としての対応を県立学校であれば県立学校がしなければならぬでしょうけれども、もしそこで進学を諦めてしまったような方がいて、進学に関してはおそらく義務教育のほうでもサポート、フォローしながら、進学できる生徒であれば受験をさせたり、進学をやると思うんですが、そこでご本人やご家族が諦めてしまえば、さあ今度は学校としての関わりというのはやっぱり持てなくなってしまって、福祉行政のほうに対象が移管してしまっているということは考えられると。
- 和田委員 大きな問題もなければほっとかかれてしまっているようなケースもあるようなんですね。でもその子達もやがて働けるようになって、自立できていったほうがいいのかと思うんですけども、そのへんは福祉との関係なのか、狭間なのか・・・
- 小島課長 そうですね、そこが狭間になってしまって、切れてしまうとうまくないですね。
- 和田委員 やっぱりそういうケースがあったり、それから定時制とか行っても途中で辞めてしまう。結局、不登校になったんですが、高校に行ったんだけど辞めてしまったということで引きこもっちゃってるケースもあたりしますので、そのへんの実態はどうなのかなというのも知っておく必要があるのかななんて思ってますけれど。
- 小島課長 引き渡しがうまくいっているかどうかというのはちゃんと把握しておかなきゃいけないと思います。引き渡してしまったあとは中々教育委員会で責任を持つてということは難しいのかもしれないけれども、今、委員がおっしゃられるように、そこが全然途切れちゃって、こっちも知らない、あっちも知らないというふうになっているとすると、確かに問題はあるかもしれませんね。
- 青柳課長 データはないんですけども、今までの経験の中で言うと、今、話があったように、やっぱり学校に通えないということで、定時制とか、通信とか、あと一部私立のほうに状況を説明する中で学力検査をして進学しているという、そんなことが大いにあると思います。
- 小島課長 実態把握みたいのはしていないということですよ。実態把握。それが、どこにどれくらいそういう子がいて、先程、教えてもらったように263人、26年にいた子達がそれぞれみんなどういう状況になっていて、どこかの時点でもしかしたら進学してない子もいるし、辞めちゃった子もいるしというようなことがどうなっているかというのは把握はしてないんですね。
- 和田委員 多分、福祉との関係になってくるかと思いますがけれども、やっぱりまだ、でもやっぱり卒業した子ども達ですので、ある程度の情報を交換しながら、在学中にじゃあどんな指導をしていったらいいのかというふうなことにつながっていくのかなと思うので、そのへんも実態が分かるといいのではないかなんて思いましたけれども。

- 小島課長 協議できるような場はあるんですか。福祉と何か、協議というか、話をするような場とかそういうもの。特には、今はない。
- 鈴木室長 今はないですが。
- 教育長 今回の調査はちょっと趣旨が違うので、全体のマクロを見ようとしている調査なので、それはちょっと個別の、また調査だとか、連携だということかなとは思いますが。ただ、こういうデータって、いろいろ分析をすると中々興味ある傾向が分かるのかもしれませんが、そういう視点では少し広げて分析をしていく必要あるのかなと思うのですけれども。
- 和田委員 今年度の調査で、通信制高校の希望者が増えていますよね。9人ですけれども。それもそういうこととも関係があって、経済的な面でも普通高校には行けないので働きながら通信という子もいるかもしれないんですけれども、不登校の子ども達の生活のリズムが昼夜逆転みたいにしていていうのは朝から行くっていうのはとても難しかったり、きちんとした毎日でなく、中には通信を頼んでしまうとか。結局、通信にしか行かれなかったという子ども達もいるんですけれども、そのへんもきっと高校側は分かってらっしゃるんですね、この子は不登校だったとか。そういうことも、ここで今人数が出ていたので、増えているということは、そういうことも言えるのかななんて思ったので、そういう子ども達がこれからどういうふう自立していくのかなということもすごく気になっていたので。
- 飯室委員 この通信は私学も入っているんですか。
- 鈴木室長 入っております。
- 飯室委員 これには甲斐清和高校が今度あれやったから、定数は間違いなく増えますよね。あそこは、だから、そういう不登校もいるけど、スポーツが何かで目指している人は通信高校へ行っていて、100%練習をやったりする人もいますよ。あそこは正月視察に行きましたけれど。だからそういう意味でいくと全部悪い人ばかりでなくて、逆に前向きでいい人も甲斐清和なんかは結構拾っていますからね。そんなに悲観的にならずにね。
- 和田委員 去年、公立の定時制からの学科で甲斐清和の通信でインターネットでやっていたという生徒さんもいらっしゃるんですね。
- 教育長 ありがとうございます。
- 武者委員 産婦人科の立場からちょっと質問なんですけれども、やはり3の進路のところ、家業、家事手伝い等、あるいは表のところに入るであろうこととして、15歳未満、義務教育までの間に妊娠・出産をしてしまう女子というのがやっぱり問題になっていて、全国で毎年、今日、正確な人数、年に2回する会があって、私、山梨県から出ているんですけれども、やはり妊娠したよということ、本人は、その女子がいくら学校で義務教育を学びたいと思っても、学校の先生のほうから、「まあまあ、身体に悪いし」とか、なんとなく他の生徒に影響があるからと、やんわり義務教育から外されてしまうという実態が全国であります。山梨でも、聞いてはないですけれども、私の知る限りでもやっぱりいらっしゃるということは存じてます。この中にそういう方がいるのかどうか。今回はあれですけれども、それも中々分析するのは難しいとは思いますが、体調不良というふうになっちゃうかもしれないし、そういう女子たちがまた復学できる道筋というのがまったく日本ではないので、そのまま貧困の連鎖ですとか、虐待なんかにつながってしまいかねないので、少ないかもしれないけれども、でも確実にいますという。中には17歳で3人目というような人もいますね。するともう相手はみんな一人一人違いますし、性教育などを、私個人的には県内・県外やっているんですけれども、まだ山梨県の産婦人科医会として、『みんなで作ろうよ』という感じではまだ到底ならないので、ちょっと依頼されたらやるという形で小・中・高、親御さん達も含めてやっていますが、もし可能であれば県のほうで産婦人科の学校医ですとか、そういったものを指定して、そういった性教育、これから少子化のところでも、今、妊娠適齢期なんていう言葉もあったり、卵子の、一番いい卵子を、老化なんていうのもやっとな保健体育で去年、一昨年ぐ

らい入って、多くの学生さん、大学生なんか聞いても、いつでも妊娠できると思っているという人が多いなんていうアンケートも出ていますし、やっぱりこれは知っている、知ってない。学力がある、ないとかで関係ないんです。優秀な学生さんで、もう大学も推薦で決まっているなんていう人が、これは高校生ですけども、高2、高3の2月に出産なんていうことがあって、でもこれは女の子ばかりが大変な目に遭って男の子は逃げちゃったりというようなことがあるので、これはちょっとどうなのかなというところがあります。やっぱり教育ってすごく必要で、女子も男子もそういうものを学ぶ必要があるんじゃないかなんていうようにちょっと思いまして、提案させていただきました。この中にそういった子がいるかなんていうことは、今後また入れていただくのがたいなど。結構、学校は隠そうとしますので難しいとは思いますが、でも、そういう方たちが困っている現実が全国的にもあります。以上です。

教 育 長

和田委員さん、武者委員さん、いいお話ありがとうございます。ただ、この調査の目的が進路指導の今後の資料のためのデータなので、広くあまねく、こっちは倍率がすごくて、こっちは薄々で、県立の定員が相当余っちゃったということがないように、中学のほうで進路指導の資料なので、あんまりそこまで突っ込んで考えたものではない。いずれそういう、今後どうやってその高校の窓口を、今みたいなものも対応できるような形でというのは、多分また別の制度の話で、いろいろお話を聞くことになると思います。今の話については、今回のこの調査結果の概要とそこまで突っ込めないものですから、ご参考までにお話を伺ったということによろしいでしょうか。

飯 室 委 員

数字、やっぱり毎年同じような調査の仕方で行っていますので、ちょっともう一ひねり、ちょっと加えて、例えば県外に行く高校生は何の目的で行くとか、そういうクエスチョンとか、あるいは就職もニーズを担っていますから、どういう職業に就くのとか、ちょっとやっぱり一歩先の、ちょっとクエスチョンを加えたり、あるいは学校でも、自分の家から例えば1時間とか、違うところに行く人もいますよね。そういう何かデータなんかを作ったりして、まるやかにしたほうが、せっかくこれだけアンケートを取って、ただ高校行きますか、どこの学校ですか、そこばかりだともったいないと思いますので、例えば段々生徒も減ってきますから、そういう地域割りとか、そういうのは大事だと思うんですよね。そういうデータを作るためには何か資料を持っていたほうが良いと思うんですよね。それでいつも、何でもそうだけど、最高倍率の学校は出てくるけど、最低倍率はないので、資料の中には。それはやっぱり、いいところもいいけど、低いところはじゃあどうしたらいいかという。例えばこの峡北なんか、北社なんかはすごいですよね。理数科で、甲府南の理数は高いのに、どうしてここは9人しか来ないとか。そういう分析を捉えて資料を作らないと、ただ足し算引き算して出して、去年とこれだけ違いますじゃあちょっと寂しいなど。やっぱり少子化というならもう少し詳しく分析して、棒グラフでもなんでも作って、やっぱり各先生方が刺激を与えて、進路は真剣にやらなきゃいけないという、そういう目線で送ったほうが良いと思います。ぜひよろしくをお願いします。

武 者 委 員

先程の流出ということなんですけど、これは流出してはいけないという感じ。例えば、東部富士五湖地方ですと、もう2～30年前から甲府に行くのと都内に行くのは時間が変わらないので、やっぱり都内の進学校のレベルが高いところに行くというお子さんも確実にいて、今、電車も増えていますので、通常に中学受験から行く人も多いですし、昔でも高校から結構行ける。そうすると国立、調布、三鷹辺りまでは行けたりするので、富士急行線も乗り入れたりして、ますます都留とかからも行っているなんていう人は、コンスタントに現実にいます。前の時も、静岡側もやっぱり御殿場の方の、県内ではなくて、県外。でもこの間の話だとそれでもいいよねみたいな、それでもまた戻ってというか、何かいい刺激があればいいんじゃないみたいな話だったんですけど、これはやっぱり確実に東部富士五湖の人って、甲府よりも都内を見てます。そうすると流出してはいけないからそれを食い止めようみたいな話なのかどうなのかと。

- 教 育 長 流出自体じゃなくてですね、問題は都内でやっている教育が何で県内でできないかという、そのサービスがどうして、教育のサービスがどうして県内でできないかというところにやっぱり視点を持っていくべきだと思うんですよ。都内へ行くと、やっぱりお金もかかるし、それから時間もかかる。じゃあ、同じ教育を県内でやれば県内へ来てくれるのかと言ったら、多分来られると思うんですよ。そういう点であれば、都内へ行く理由は何かということを見ると、じゃあ県内でその教育の充実をしましょうと。例えば、行ける人はいい、経済環境があって行ける人はいいけど、行けない人はじゃあどうするんだという問題もありますので、我々教育委員会とすれば、やっぱり同じ教育環境、別に都内へ行かなくても県内で行けるとい、そういうところへ持っていく。ベースが結局は、本当に県内ではとてもできないような、例えば英語だけで授業をするような高校があれば、県内ではおそらくできないんだろうと。それはもうしょうがないというか、そうやってインターナショナルにがんばっていただく児童・生徒はそうやって伸びていく。ただ、県内で可能な限り教育で対応していく必要があるのかなというふうには考えていますね。
- 武 者 委 員 塾の先生達なんか、何人が話すそういう会があったりしたんですけれども、明らかに学力がという。もう通常の山梨県の一番いい学校ですよというのが、都内の普通の偏差値では50ですという話になってくると、じゃあねっという。井の中の蛙にはなりたくないねみたいな感じになっているっていう。だから、もう山梨・静岡は低いからという。例えば全国统一模試なんかがあっても、これじゃあもうという話で、塾の先生達も、小さい10人くらいの会でしたけれども、そういう感覚で教えていらっしゃる。全国狙っているような塾の先生達だと。それとあと学力があってガツガツやるだけではなくて、やっぱり文化祭ですとか、そういった部活動とかというところが充実しているというのがありますけれども、やっぱり一番魅力があって、時間かかって疲れたり、お金もかかるかもしれないけど行きたいよというような目標を持って、目標にやっぱり近づけるからという、学力のところが大きい印象は持っています。
- 教 育 長 これ、人口減少の問題と相当密接に絡んできて、地域間競争、自治体間競争になっています。ですので、例えば山梨大学もそうですし、なるべく地元の子どもを、児童・生徒を入れたいと。それは地元の定着率が高いわけですね。山梨県の公立学校も、地元の定着率ももちろん高いわけです。それは東京へ行かされると、今度は山梨県の良さが分からないまま中学までで終わったり、あるいは小学校まで。東京へ行くと山梨県の良さが分からないまま県外へ出て行かれるということはたいへん残念だと。それで山梨県の高校までは少なくともいていただければ、山梨県の良さが分かるということで、私共もそういう地元の良さが分かるような教材を今作って、間もなく、今年度中には配ろうとしています。そういうこともあるので、学力の問題もあるし、もう1つは地元の良さを分かちてもらおうということを教育にいか反映していくかと。それでもって山梨県の良さ、あるいは足りないところを見定めて、県外に行かれるということはやむを得ないけれども、山梨県の良さが分からず、あるいは学力もこういう所へ行けばちゃんとしっかり教育ができるということを周知しながら、やっぱり教育の内容に忠実にしていくというのがたいへん重要なのかなと。流出が問題ではなくて、流出の原因がおそらく問題。何で行かれるのかということなんだろうと思う。だからそれをやっぱり地域間競争に勝てるような、教育だけでなく、福祉も医療も同じだと思うんですけれども、そういうことを考えていくということだと思っんですけれども。ただ、山梨県は全てできると思っていないので、流出が絶対駄目だということでは多分ないと思っんです。そういうことかなとは、個人的には考えてます。
- 武 者 委 員 選択肢がある地域というのは大体限られてくるので、東部富士五湖ですとか、あとそういった静岡県に近い所だとか、そういった所でアンケート調査ですとか、どうなのというのを聞くと、わりと早くまとまると思っます。
- 教 育 長 ありがとうございます。
他にありませんでしょうか。
- 白 川 委 員 私はいつもこのへんの調査の時に、同じことを、もう3年、多分確認しているんですけれども、それは塩山高校なんです。何で塩山高校かと言いますと、繰り返しちゃいますけど、少人数になっていって学校がやっていけないから、塩山高校の科を編成して、人を呼ぶような魅力ある学校にしようということで、確か4

年前かそこらに決めて、じゃあそのあとの結果がどうなったのかということで、いつも塩山高校を、私注目していて、私知っている中では、その後に都留興譲館高校が合併しました。それから探究科というのを甲府一高につくりました。それから甲府工業高校に専門の学科をつくりました。それが、先程、飯室さんがおっしゃっていたところのお話と、私もまったくそこのところをやっていたきたいなと思うのは、アンケートみたいな形で、本当にただこの志望校を書くだけじゃなくて、何で探究科がいいのか、何で塩山高校を選んだのかというところを、ちょっとそういう形で出していただくことが、今後の県の学校づくりの一つの、何か情報の収集になるんじゃないのかなと思ひまして、どうしても甲府工業高校は人気があるのに、同じ工業高校なのになんで他のところは駄目なんだろうとか。それは甲府集中なのか、それとも何か違う、科の魅力なのか。つまり2年制、3年制のものをつくったことが魅力なのか。甲府だからが魅力なのか。探究科も同じですね。そういうところをちゃんと捉えていきたいなというふうに思ひますので、ぜひそんなようなアンケートみたいなものというか。志望校アンケートを子どものものをちょっと私見ましたけれども、志望校の1と志望校の2を学校名を書くだけみたいなのが多いんですね。あそこのところは何でっていうものを一つ添えるだけでいいんじゃないかなと思ひますけどね。

白川委員 12月にやるやつは先生が色を付けちゃいますので、ここが一番父兄と子どもが行きたいという本音の部分じゃないかな。実態ですよ。だからここのところを学校づくりに一番反映できるんじゃないかなと思ひますので、ぜひそのようなことを、先程飯室さんが言ったところは、私は大賛成です。お願いしたいなと思ひます。

鈴木室長 確かに、今行っているアンケート調査というのは、理由は一切聞いておりませんので、そのへんのこととはちょっと分からないような状況になっております。ただ、これとは別に高校改革アンケートというのを毎年実施しております。中学3年生と高校1年生に、例えば高校生であれば、『なぜその学校を選んだのか』とかですね、そういうアンケート調査は実施しておりますので、それらを分析すれば、そうした傾向みたいなのは分かるかとは思ひんですが、ただ、塩山高校を希望した子ども達に塩山高校をなぜ希望したのかということの設問では、なぜ塩山高校が人気がないのかという、希望者が少ないのかということまでちょっと分かりませんので、ちょっとそのへんはまたご意見を踏まえて、このアンケートのやり方を含めて検討させていただきたいと思ひます。

白川委員 多分、私の思うところは、塩山高校を志望した人というのは、近いからとか、我々の地域なんて僻地ですから、大体そういうところの理由が高いと思ひますよね。そうすると近い所で求めるものを受かったとかというのが良くて、それを商業科にすればいいとか、英語科にすればいいとかというのがその時の議論だったもので、それって、今度は広い、人口が多い所の話じゃないのかなって気がするんですよ。そのところをちょっと、やっぱり知りたいなというところですよ。

飯室委員 クエスチョンの内容が駄目なんです。そこを言ってるんですよ。もう少しクエスチョンを、切り口を細かく書いてやったほうがいいです。そうしないとデータは取れないと思ひます。毎年同じことをやっているんだから、毎年同じクエスチョンをやります。前に行かないと思ひますよ。だからぜひそこらへんをちょっと切り替えて、終わったことはしょうがない、これからどうするかという、そっちに目を向けて、質問の項目を、ぜひ優秀な官僚がいらっしやいますから聞いて、ぜひお願いします。そうすると分析は間違いなくできますから。よろしくお願いします。

教育長 何かやることにデメリットはあるんですか。

鈴木室長 特にデメリットはないと思ひます。集計作業に手間がかかるという程度のことだと思ひます。

教育長 そんなに大きな手間じゃないよね。あまり生徒に負荷がかかりすぎて中学校からクレームが付くとか、そういうことはないんですよ。

鈴木室長 ないと思ひます。

教 育 長 私もそうやって指摘されると、その通りだなと思うので、ぜひ、今、白川委員が3年間言われたけれども中々直らないと、たいへん私も耳と心が痛いので、ぜひ来年は中学校の理解ももらいながら、自分達が行くところの高校をどうして良くしていくかという話だから、ぜひ対応しましょう。他にありませんでしょうか。

白 川 委 員 これはちょっと就職希望者のところで、増えているというところだけちょっとひっかかったところがあって、それってイコール、よく言うところの仕事をしなければ進学できなかった理由というのは、仕事をしなければならなかった家庭事情だとかってなってくると、ちょっとどうかと、今、こういう話題になっていますので、というふうに感じました。これもちょっと、これだけ書いてあるだけでは内容が分かっていませんので、何かそんなところがまたあとからついてくるんじゃないかなと思いました。以上です。

教 育 長 ありがとうございます。

【 了 知 】

(16) 山梨県社会教育委員の会議の提言について

[説明] 社会教育課

【 了 知 】

(17) 山梨ことぶき勸学院創立30周年記念行事及び第30回勸学院祭について

[説明] 社会教育課

野 田 委 員 ことぶき勸学院30年経っているじゃないですか。青年会議所の時に、ことぶき勸学院ができて2～3年後ぐらいの頃に、我々も山の都大学って、社会教育の大学を青年会議所が作っていたんですね。その頃、単位の乗り入れみたいなことをやっていたような記憶があるんですよ。今、これを見ていると、実習修業年限が2年で卒業もあるということなんだけれども、例えば、それだって生涯学習ということで始まったと思うんですね。山の都大学も対象は違いますけれども、生涯学習という観点で同じだったんですね。そうすると卒業ではなくて、永久にね、自分が学びたいという意欲がある限り、何かをできるというようなシステムとか考えているわけですか。

野 田 委 員 卒業もあってもいいですけど、例えばこういうことをもっと、例えば文学とか考古学とか、そういうものをもっと学びたいよとか。例えば60で入って2年になった。62なんてまだまだバリバリですからね。

岩 下 課 長 1つは、まず選択コースの部分というのがございまして、単位の乗り入れではないんですけども、その資料の20ページの経緯の下から3つ目の丸のところにあります、県市町村大学等の公開講座を受講するという部分がございまして、それも単位として認めるというような形で、相互じゃないんですけども、他のところへ出て行って受講するというのを認めています。あと終了、卒業した後ももう一度ということも、定員に満たない場合には認めておりますので、4年目、6年目という方も中にはいらっしゃいます。ただ、その後につきましては、特にそういった講座等は設けてないんですけども、逆にまた地域へ出て行かれて、地域で指導的な立場でご活躍いただきたいということでお願いしているところです。

野 田 委 員 例えばね、それができるかどうか別として、学校のいろんな学科があるじゃないですか。そうしたところへ、例えば受け入れてもらえるようにするとか、多少お金を出してもいいですから。そういうのがあれば、もうずっと学び続けたい人にとってはそれが生きがいになっていいんじゃないのかなと思うんですね。

岩 下 課 長 はいわかりました。

教 育 長

今、生涯学習推進センター、この1階にある、生涯学習文化協会というところがやって、県の施設で運営している、そこへ事実上の実務をお願いしています。そこも、例えばことぶき勸学院と似たようないろんな教室をやっていますので、そこが両方とも実質の運営主体は同じですので、そういうところと連携しながら、例えばこの教室、この1階に会議室というか、イベントホールが3つあるので、そこを使いながら。各地域でも生涯学習推進センターはそれぞれ、教室を持っているんですけども、それぞれやっていますので、卒業後であっても引き続き同じような方々をご担当でこの下にいらっしゃるので、じゃあ俺もせっかくここへ来て通り慣れたからやってみようかなと、次のところへというところの連携は今後よく取っていけるようにして、これでおしまい、もう俺何もすることないよということはないようにはして、それも生涯学習推進センターも、ものすごくいろんなことをやっていますので、これはもう決められた単位があって、決めたルートがあるんですが、それを卒業すると今度は自分で自由に選択ができて、ものすごく幅が広いメニューが広がっていますので、そういうところにシームレスで行けるような形で連携をしていければと思っています。ありがとうございました。

飯 室 委 員

30年間、本当に生徒達は60過ぎまでがんばっている。それから先、子ども達とやっぱり一緒にふれあうとか、そういう新しい面に加えて、さっきの卒業したら行くところがないというのがあったら、その卒業生はどこかにラウンジか何かつくって、卒業生はそのラウンジに行けば、朝10時から5時までは同志の仲間が来ていろいろ話し合いができたり、解決したり、ゴルフに行こうとか、ボーリングとか、何かそういう集まる場をつくってやれば、その学校を出た卒業生たちが、何かそういう生きがいを感じて、卒業したら昼間はこっちへ行けばあそこの施設が使えてちょっとお茶が飲めるとかというような。これから30年越えたから、何か31年に向かって、何か新しい切り口で新しいことをやってみたいと思うんですよね。ぜひよろしくお願いします。

教 育 長

ありがとうございます。

和 田 委 員

変わってですけれども、学校現場で、例えばことぶき勸学院の方達が家庭科の実習の時に来てくださったなんて話を聞いたことがあるんですけども、今、飯室さん、もう関係ないかと思うんですけども、ぜひそういう所にも、学校のほうから要請をしなければいけないかとは思いますが、そういうふうな形で子ども達とふれあいながら、子ども達も来ていただいて良かったとか、来たほうもこれが生きがいになるとかというふうな形で、ボランティア活動みたいになるかと思うんですけども、そういうこともすごく大事ではないかななんて思いました。先程、社会教育委員の方々の定員の提案の中に、地域の中でそうやって核になって動いて下さる方がとても必要だというふうなことも書かれていたもので、ぜひ卒業された方たちが大いに地域でリーダーとなって働いてくれたらいいのかなと。実際にされている方もいらっしゃると思うんですけども、意外と地域の中でことぶき勸学院の存在を知らないというふうな方たちがいるような聞いたこともありますので、ぜひPRしていただいて、社会貢献をしていただければいいかなと思います。

教 育 長

生涯学習推進センターと、今年の4月からボランティアセンターが昔の春日小学校そばにあったのが、耐震構造ができてなくて使えなくなったので、新たにボランティア協会も、下へ併せて、衝立1つで両方が今団体が入っていて、連携を取れるような形になっています。ことぶき勸学院もそういうところの物理的なところにやっぱりメリットがあるので、今言われたボランティア活動になるのか、まだまだ自分が教養を身に付けるだけではなくて、逆に児童・生徒に教える、いろんなことを教える力もまだまだあるのであれば、そういうこともできるようにぜひ考えていければと思っています。生涯学習センターは実務を持っていますので、そういうところにも働きかけをするようにいたします。ありがとうございました。

【 了 知 】

- (18) 第71回国民体育大会の結果について
[説明] スポーツ健康課

教 育 長

私も体協の副会長という役職でやっています、広島の開会式とバドミントンを
見に行きまして、岩手県のチームが、山梨県とやったのは別の県だったんです
が、岩手県が出ていて、体育館中が岩手県の応援になっていて、相手方がかわい
そうだなぐらいで、応援の力はすごいなと思いましたね。会場が、1点岩手県が
取るとウワンウワンするんですね。相手方がかわいそうなので、相手方が点を取
るとちょっと小さめに拍手していたんですけども。非常に、やっぱり地域性
の、地域的なぶつかり合いなので、非常に面白い、国体って、面白いなど。いず
れ山梨県も10年後か15年後か、いずれ回って、順番は回ってやるんでしょ
うけれども、非常に施設整備も、競技力の強化も、指導者の養成もたいへん課題は
あるんですけども、それなりに成果もあるので、いずれ何か山梨県も来たとき
に盛り上がればいいななんて思いながら行ってまいりました。
じゃあ、この件についてはありがとうございました。

【 了 知 】

〔 教育長閉会宣言 〕